萌芽的研究論文

ケアの記憶の語りによる母親言説からの脱出

―障害のある息子を育てる母親との対話事例―

沼　田　あ　や　子

障害のある子をケアする母親は，たとえ違和感をもっていても社会で形成されたケアする母親言説に囚われやすい。本研究は，ケアする母親言説から抜け出すような言葉が対話を通して生成される際の鍵となる概念を考察するものである。発達障害のある子と暮らすなかで自分を責めて自信をもてずにいる母親1名に対し，対話形式のインタビューをおこなったところ，従来の研究では分析対象とならなかった新しい言葉が聞かれた。この対話を「ケアする母親言説から脱する言葉が生成された対話事例」として分析したところ，「違和感の語り」，「怒りの語り」，「脱出の語り」というシークエンスが見られた。新しい言葉の契機となったのは，語る人固有のケアの記憶であることがわかった。対話において，ケアの記憶に喚起されながらケアについて語ることが，ケアする母親言説の外に抜け出す鍵概念であることを提示した。

キーワード：母親，ケアの記憶，言説，対話

1. 問題の所在と目的

1-1　ケアする母親言説の壁

ケアする母親に関する言説には，母親を安心させる側面と不安にさせる側面の両方がある。言説によって自分を納得させることもあれば，差異を感じて孤独になることもある。ケアする母親言説を形成してきたもののひとつに，母親へのインタビュー・データに基づいた研究がある。妊娠・出産をめぐる経験や疾病や障害のある子を育てる経験について，当事者である母親の声を聴くことで，より良い母親支援の模索が続いている。しかし，ケアする母親の声のすべてを解釈し尽すのは難しい。インフォーマルな場やSNS上のあちらこちらで

聞こえてくる「つぶやき」は怒りや苛立ちを帯び，そこに仲間の共鳴はあっても社会からの十分な応答はごくわずかである。この問題を検討する前に，障害のある子をケアする母親の語りに対する解釈の偏りについて述べる。

最初に，本論で使用する言説という用語について定義を明確にしておく。「育児言説」に関する研究をおこなった天童・高橋の定義によると，一般に言説は「談話，説話，論述」であるが，「それが社会のなかの権力関係と結びつくとき，単なる発話や記述を超えて『力を付与されたことばの束』になり，人々の思考や行為を明示的・暗示的に統制する作用をもつ」（天童・高橋 2016: 2）。本論では後者の意味で言説という用語を使用する。

障害のある子をケアする母親は，社会的に疎外される傾向にある。日本では長年に渡って，子育てや介護等のケアは家庭内の女性によって無償で行われてきた。近年保育等の福祉サービスが拡大して労働市場化してきたとはいえ，ケアの賃金は家事の性質を内容とする労働として低く設定され（萩原 2017），ケアする者は十分な評価を与えられていないと言える。そのなかでも障害のある子を育てる母親は，ケアの担い手としての生活を長期的に過ごすことが当然とされ，就業機会も狭められている（藤原 2006）。ジェンダー平等をめざす社会において周縁化され，責任を負わされる立場に置かれている。寄る辺ない状況では，「力を付与されたことばの束」であるケアする母親言説に引き寄せられやすいと考えるのが妥当だろう。

障害のある子をケアする母親についての言説には，大きいものが2つある。長い歴史があるという点で，まず，障害受容言説が挙げられる。親が我が子の障害に対して段階的な受容をしていくという段階モデル（Drotar et al., 1975）は，受容というゴールが希望的な見通しを提示し，インパクトが大きかった。障害受容言説に関しては，受容という枠組み自体への批判（南雲 1998, 夏堀 2003）がなされ，近年，研究的関心は困難への支援にシフトしている（中田 2017）。

次に，障害がある子どもを育てることによって親が成長するという言説がある。主に心理学領域において明らかにされる親の現実のひとつである。親になることへの適応過程が，Erikson（1982）の成人期の発達課題と一致する（氏家ら 1994）という前提にもとづき，障害のある子を育てる母親の成長プロセスに着目した研究が多くおこなわれた。これらの言説は，障害受容言説と重なる部分があるが，加えてポジティブな見方も描き出した。このポジティブさゆえに，親の成長言説は母親たちの心に大きく影響していると考えられる。そして，障害のある子をケアする母親たちは「叱らない育児」や書店に並ぶ障害児の育児本などの実践によって，より良い母親になることを目指し，母親自身が

言説の強化に参与することになる。

子どものためという大義と心理学の実証研究の裏付けをもった言説は，実践と研究の両面から強化されやすい。しかし，権力がある者によって形成されたケアする母親言説が，母親のみがケアを背負うことを承認しているだけでなく，ケアのやり方を規定していることを慎重に見る必要がある。母親の語りを質的に分析する研究も，従来のケアする母親言説に囚われている限り，言説の閉塞に大きく関与している。本論では，インフォーマルな場での母親たちの声はケアする母親言説に対する異議申し立てであると捉え，言説の閉塞を変化させようとする試みが母親の怒りや苛立ちへの応答になると考える。

1-2　女性の語りの特徴

女性の語りに限定して論じることが可能な背景には，女性運動の高まりとともに草の根で行われてきた聞き書きの歴史がある[1)]。聞き書き研究において，女性が自分自身の経験を語るときの語り方についてChanfrault-Duchet（1991）は，女性が社会的な自己を意識して語るとき，同時に経験の価値評価をしていると指摘している。また，常に自分自身をドミナント・モデルと対峙させており，女性の語りは，置かれている立場に過剰に規定されるという指摘も重要である。ドミナント・モデルはジェンダーによる権力勾配と密接に関連しているため，女性は男性を対象に形成された理論に自分を合わせようとする。たとえば，うつ傾向にある女性を対象にしたあるインタビュー調査では，女性たちは，男性のための“成熟”や“健康”の規範を受け入れて，期待されるストーリーを語ったという（Anderson & Jack 1991）。

同様に，子育てについての語りもドミナント･モデルに強く規定されている。子育てナラティヴの日米比較をした秦ら（2017）は，日本人の母親の語りの特徴として，夫を語るときの「～してくれた」という恩恵表現を挙げ，「育児は女がするもの」という規範が強いことを見出している。さらに，育児を終えた年代では「こうしたかったけどできなかった」という後悔の念がにじみ出る語りをする傾向にあるという（秦・岡本・井出 2017）。この特徴については，米国のオーラル・ヒストリー研究者であるAndersonとJack（1991）も「女性には失敗を責める語りの傾向があり，自分の能力について語ることは慎重である」と述べており，日米で同様の特徴があると考えられる。女性の語りの特徴は，女性が女性固有の経験と男性中心社会における主流の規範，二つの側面の境界に立たされているという「境界的境遇」（春日 2011）と不可分であろう。

1-3　言説の外にある言葉の行方

女性の語りの特徴を踏まえると，ケアする母親の語りは，ケアとジェンダーの二重の周縁性によって可視化されにくく，揺らぎにくいものになっていると考えることができる。しかし，障害のある子をもつ母親の語りを分析した研究に，日常的な子育ての語りを社会規範と結びつけて解釈したものは少ない。たとえば，発達障害のある子を育てる日常生活についてインタビューした沼田（2016）の研究は，母親の主体的な行動は家族を維持するためのものという考察に留まり，語りに影響を与える社会規範には踏み込んでいない。前述の秦ら（2017）の視点を援用すれば，子育ての主体は母親であるという性別役割分業規範が語りに作用していた可能性は高い。

語りのなかには，語られる出来事にあたる「物語世界」と，聴き手を意識して発せられる「ストーリー領域」の二つの領域がある（能智 2006）。前述の女性の語りの特徴を踏まえると，母親は「ストーリー領域」の影響を強く受けると考えられる。たとえば，母親の成長や，辛いことのなかに良いこともあったというポジティブな経験は「物語世界」にあたり，彼女たちのなかで意味づけられた現実のひとつである。しかし，「ストーリー領域」の力動のために語られていない言葉があり，「物語世界」が豊かになることを制限している可能性がある。聴き手が社会規範に敏感でいなければ，母親へのインタビューと解釈において言説の枠の外にある語りに出会うのは難しいと考えられる。当事者研究をおこなっている綾屋・上岡（2017）は，専門家の研究によってつくられた「本物らしさ」に当事者が自分たちを寄せてしまう心理を危惧している。同様に，母親がケアする母親言説に自分を寄せて語ったとき，言説の外にある言葉はどこへ行ってしまうのだろうか。この問題に対し，本論では，ケアする母親言説から抜け出す語りが生成された対話事例をもとに，語りの生成に作用する鍵となる概念を考察する。

2. 事例について

2-1　語り手Ｙさん

本論の事例の語り手Ｙさんは，長男Ｋくん（インタビュー当時20歳）と次男を育てる女性（年齢は40代後半）で，多忙の夫を含めた4人家族で暮らしている。Ｋくんは小学校低学年時に発達障害（注意欠如・多動性障害：ADHD）と診断されているが，本人の意志により通院は中断している。小学校から高校まで通常学級に在籍していた。Ｋくんはすでに学校を卒業しているが，実家での同居は続いており，養育者としてのＹさんの役割はまだ続いていた。Ｙさん

は自治体の相談機関や母親グループとつながりがあり，相談経験は豊富である。現在，パート職員として企業で働いている。

Ｋくんは不注意傾向とこだわりの発達特性が強く，高校卒業後は働きながら社会における居場所を模索していた。アートを通じての仲間がおり，Ｙさんの気を揉ませる行動をしばしばとっていた。事例の対話は，Ｙさんがそのことに悩んでいた時期のものである。

2-2　インタビューの経緯

本論で紹介する事例のインタビューは2018年11月に実施した。インタビュアーである筆者とＹさんの出会いは，2012年に子育ての経験をインタビューしたのが始まりで，本論で紹介するインタビューは3回目（2回目は2016年）となる。インタビューを重ねた理由は，Ｙさんの語りは，自分のやり方を肯定できず自問自答を繰り返す迷いの語り（沼田 2018）の特徴が強く，筆者が関心を抱き続けていたからだった。このような筆者の思いはインタビュー依頼時にＹさんに伝えてある。

筆者の研究対象との向き合い方は，「人々が生きているまさにその渦中に寄り添い，関わり対話をしていくなかで，そこで問題とされていることに出くわしたならば，その解決にもむしろ積極的に取り組むことが求められる」（伊藤 2013）という質的研究の志向性に依拠している。また，心理職として母親支援に携わってきた心理臨床の背景がある。このような筆者の立ち位置と，筆者とＹさんとの関係は，後に分析の対象となる対話の内容と解釈に影響を与えているという点で踏まえておくべき事実である。

2-3　解釈の視座とインタビューの形式

本論におけるデータ収集と解釈は，多様な位相をもつ女性の生活経験を手がかりに，新しい母親の側面を探求する姿勢にもとづいている。したがって，インタビューは，決められた項目を明らかにする目的ではなく，対話実践をすることで新しい気づきに出会う目的でおこなった。語りの研究を，能智（2013）の整理に倣って「語りの構造を明らかにするもの」，「語られた人生の意味を探るもの」，「経験のかたちの多様性を描き出すもの」に分けるとすると，本論は経験の多様性を描き出すナラティヴ研究に位置づけられる。Brinkmann & Kvale（2008）のメタファーを借りれば，旅先で出会った人々との会話から新しい知識を得る「旅人」型のインタビューといえる。以上の視座から，この目的に適した非構造化および対話の形式を採用した。

インタビューが対話的に進むように次の二つの点に留意した。まず，認識の

点ではHolstein（1995）によるアクティヴ・インタビューの「語りは二者の解釈実践である」という捉え方に依拠することとした。次に技法として，インタビュー中は自分の感じたことを言葉にして伝えるようにした。聴き手と語り手がお互いに感じていることを通じて，創造的なインタビューが可能になる（Holstein 1995）という考えに基づいており，本論の目的に適している。二者の反応がお互いの語りに影響を与え合っていることを前提として，分析と考察をおこなった。

時間は，レコーダーで録音した時間が約90分であった。録音と同時にインタビュアーである筆者がメモを取った。後日，録音したデータをもとに逐語録を作成した。

2-4　倫理的配慮

インタビューに先立って，首都大学東京（現・東京都立大学）南大沢キャンパス研究安全倫理委員会の承認を得た（承認番号H-30-108）。倫理的配慮として，インタビュー依頼時に，研究発表においては語りがそのまま引用されることがあること，その際には個人が特定されるような情報は出さないことを伝えた上で，インタビュー拒否の自由を説明した。音声データの逐語化に際して，個人名はイニシャル表記として，個人情報に配慮した。分析後に，語りの引用の許可を取った。

3. 対話のシークエンス：テーマの変遷とＹさんの語り

筆者との対話から生成した語りのシークエンスを，ケアする母親言説から脱出した言葉が生まれた事例として示す（図1，図2，図3）。対話の逐語録を読み込んだところ，7つのテーマの変遷が見られた。逐語データとテーマとの関連について，質的研究に熟知している研究者とともに確認をすることでデータとの乖離を防いだ。本項では，語られた順にしたがってテーマ１～７が語られたプロセスを解釈していく。

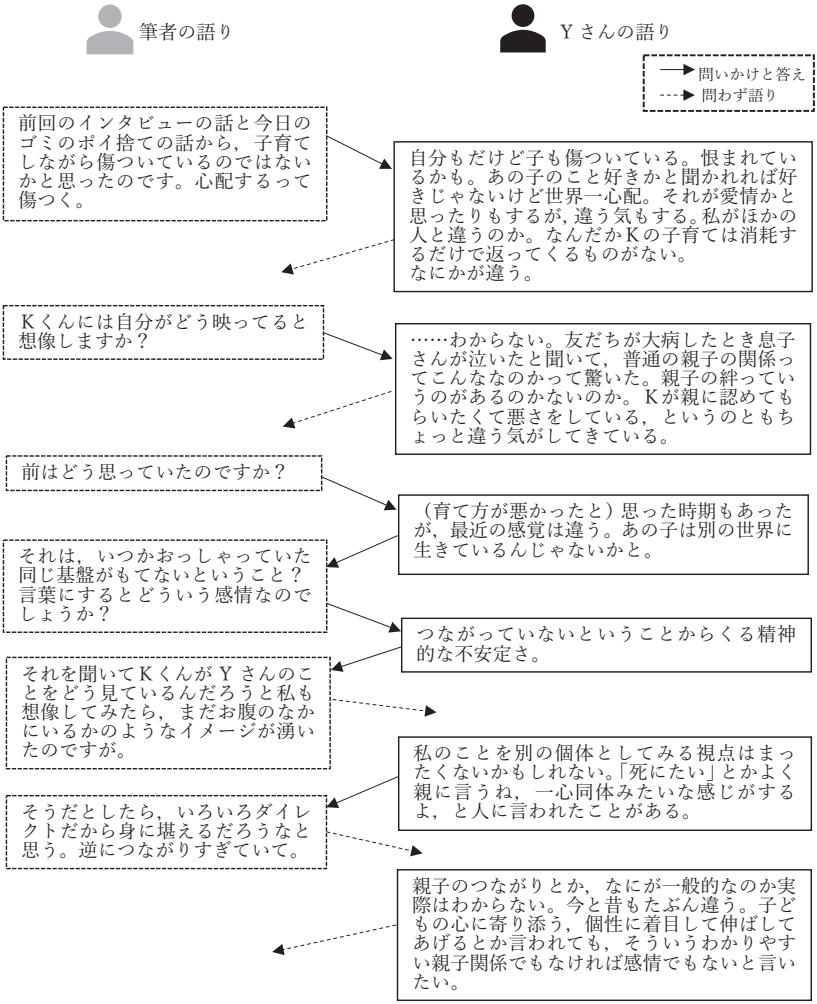

図1　対話のシークエンス：テーマ1～テーマ2

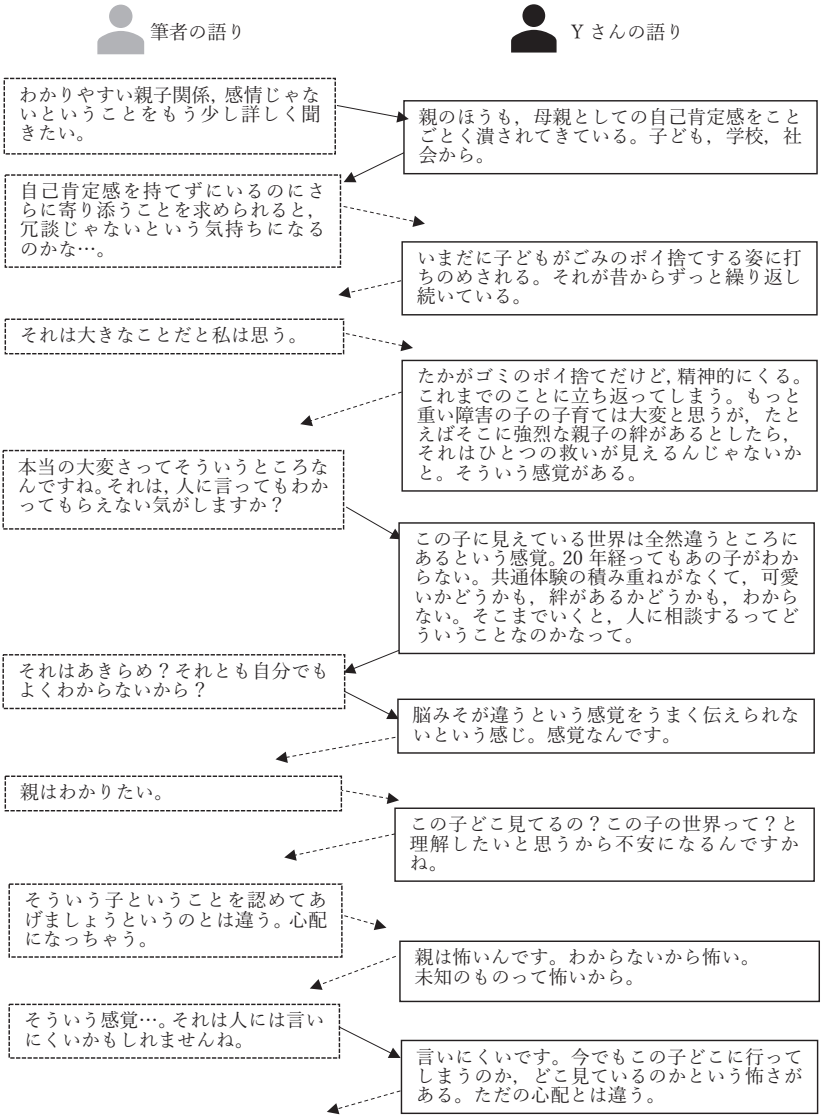

図2　対話のシークエンス：テーマ3～テーマ4

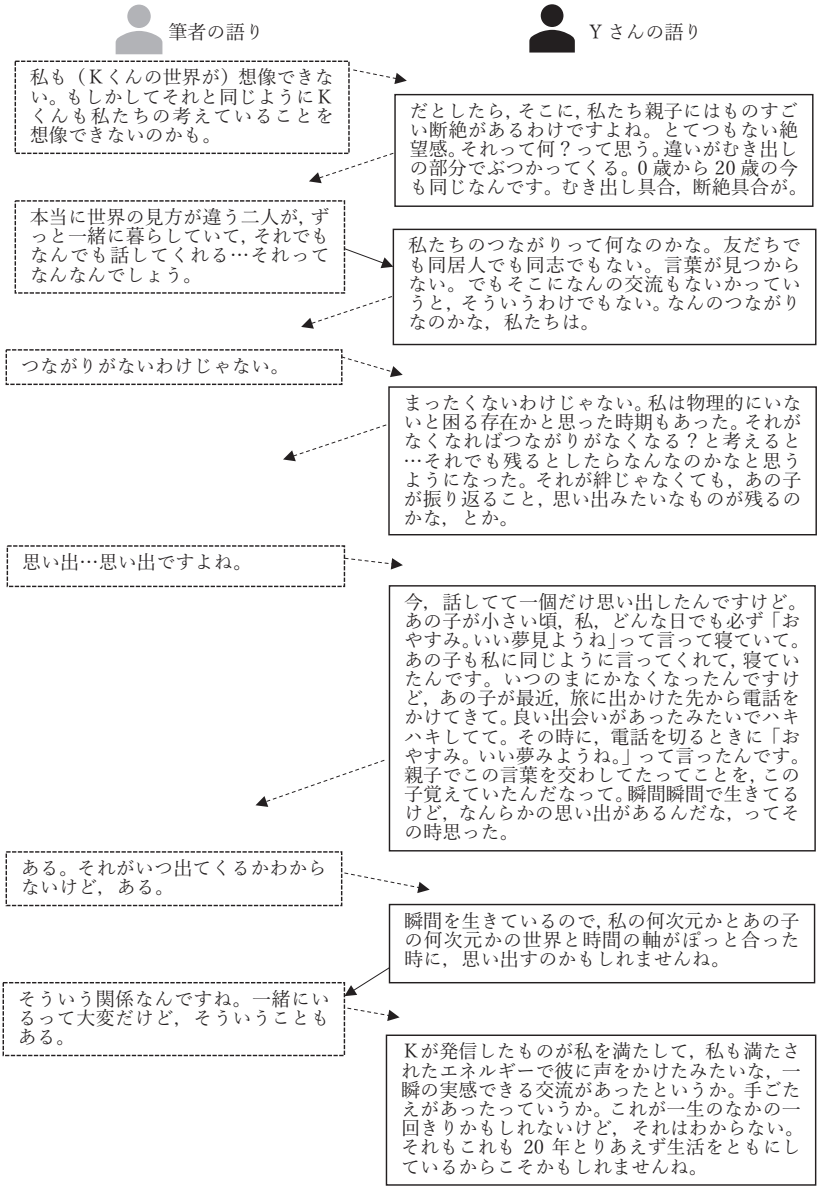

図3　対話のシークエンス：テーマ5～7

3-1　違和感の語り

テーマ１：自分の子育ての迷い

インタビューが始まる前に，Ｙさんが，Ｋくんがごみのポイ捨てをしているのを見て落ち込んだというエピソードを語ってくれた。それを受けて筆者が，子育てでは母親が傷つくことがあるのではないかという考えを伝えたところ，Ｙさんは自分の傷つきよりもＫくんの傷つきの方をより強調した。

> 自分もだけど子も傷ついている。恨まれているかも。あの子のこと好きかと聞かれれば好きじゃないけど世界一心配。それが愛情かと思ったりもするが，違う気もする。（図1）

一読しただけではわかりにくい自問自答の語りである。Ｙさんによると，昔からＫくんがもどかしさをぶつける相手はＹさんで，反論も含めてＹさんはそれに全力で応答してきた。そのような親子の歴史があって，Ｙさんは自分がＫくんの思いに応えられていないことを気にしていたと考えられる。後悔の語りは先の2回のインタビューにおける語りと同様の語りであった。Anderson & Jack（1991）が指摘する女性の語りの特徴が表れている。

テーマ２：自分たち親子の違和感

Ｙさんの「恨まれているかも」という言葉が気になり，筆者は「Ｋくんの目にはＹさんはどう映っていると思うか」と質問してみた。Ｙさんは少し考えてから，親子の絆という言葉を出した。

> ……わからない。友だちが大病した時息子さんが泣いたと聞いて，普通の親子の関係ってこんななのかって驚いた。親子の絆っていうのがあるのかないのか。Ｋが親に認めてもらいたくて悪さをしている，というのともちょっと違う気がしてきている。（図1）

Ｙさんの語りが自責から離れて，自分と子どもの絆についての語りになった。責任の所在から，お互いの関係にテーマが移ったことになる。その後，二人でしばらく「親子の絆ってなんなんだろう？」という思索のやりとりが続いた。

3-2　怒りの語り

テーマ３：子ども，学校，社会から打ちのめされる

Ｙさんの苛立ちが感じられたのは，一般的な親子関係について言及したときだった。

> 親子のつながりとか，なにが一般的なのか実際はわからない。今と昔もたぶん違う。子どもの心に寄り添う，個性に着目して伸ばしてあげるとか言われても，そういうわかりやすい親子関係でもなければ感情でもないと言いたい。（図1）

筆者はその苛立ちに強い関心を持った。そこで，もう少し詳しく聞きたいと問いかけた。

> 親のほうも，母親としての自己肯定感をことごとく潰されてきている。子ども，学校，社会から。いまだに子どもがごみのポイ捨てする姿に打ちのめされる。それが昔からずっと繰り返し続いている。（筆者「それは大きなことだと私は思う。」）
> たかがゴミのポイ捨てだけど，精神的にくる。これまでのことに立ち返ってしまう。もっと重い障害の子の子育ては大変と思うが，たとえばそこに強烈な親子の絆があるとしたら，それはひとつの救いが見えるんじゃないかと。そういう感覚がある。（図2）

Ｙさんの自己肯定感を潰してきた「子ども，学校，社会」とは，Ｋくんの行動，寄り添って個性を伸ばすという子育て言説，そして，親子の絆を称える言説を指すと考えられる。親子の絆については，テレビのドキュメンタリーが描いた重症心身障害のある子とその母親の姿を引き合いに出して，自分たちとは違うと語った。メディアを通して形成されたケアする母親の言説に対して苛立ちを感じているようだった。

テーマ４：人にわかってもらえない感覚

筆者は，Ｙさんが今ここで語ってくれている苛立ちについて人に話さない理由を質問した。すると，Ｙさんは次のように語った。

> この子に見えている世界は全然違うところにあるという感覚。20年経ってもあの子がわからない。共通体験の積み重ねがなくて，可愛いかどうかも，絆があるかどうかも，わからない。そこまでいくと，人に相談するってどういうことなのかなって。脳みそが違うという感覚をうまく伝えられないという感じ。（図2）

発達障害のある当事者からは，人と「つながれない」という困難はすでに語られている（綾屋・熊谷 2010）。そうであれば，相対する母親が「絆があるかどうかもわからない」という感覚を持つのは当然のことと言える。それを相談したときの相手の受け止め方や評価を気にしている様子があった。

3-3　脱出の語り

テーマ５：怖いという感覚

Ｙさんが，つながれないことによる不安を口にしたときに，筆者が「（その気持ちは）その子を認めてあげましょうというのとは違いますね。心配になっちゃう。」と語ると，Ｙさんは「怖い」という新しい言葉を口にした。

> 親は怖いんです。わからないから怖い。未知のものって怖いから。
> （筆者「それは人に言いにくいかもしれませんね。」）言いにくいです。世界の成り立ちがわかるとか，今でもこの子どこに行ってしまうのか，どこ見ているのかという怖さがある。ただの心配とは違う。（図2）

「怖い」という言葉を聞いて，筆者は思わず「それは人には言いにくいかもしれませんね」と言い，評価を気にするＹさんに同意した。心理職として，子どもを受け止めて寄り添わなくてはいけないと考えている母親に数多く出会ってきて，それが「好ましい子育て」のドミナント・モデルであることを知っていた。我が子が「怖い」と表現するのは，その外にある言葉だった。

テーマ６：親子の断絶

Ｙさんが我が子の生きる世界がわからない怖さについて言及したことで，筆者は，ふと思い立ち，同じような気持ちをＫくんも他者に対して持っている可能性を口にしてみた。それを聞いて一瞬考えてから，Ｙさんは語った。

だとしたら，そこに，私たち親子にはものすごい断絶があるわけですよね。とてつもない絶望感。それって何？って思う。発達障害って脳みそがどうなってることを言うの？って。違いがむき出しの部分でぶつかってくる。0歳から20歳の今も同じなんです。むき出し具合，断絶具合が。（図3）

この語りに関わった者として，筆者はＹさん親子に断絶があることを認めざるを得なかった。親子の断絶も子育てのドミナント・モデルの外にある。しかし，いったん断絶があるという前提に立って考えてみると，違う景色が見えてきた。断絶していても継続する関係の存在である。筆者はＹさんとＫくん親子は決して会話がないわけではないことを思い返し，「でも，なぜＫくんはＹさんに自分の気持ちを話してくれるのか」と質問してみた。するとＹさんも「なんのつながりなのかな，私たちは…」としばらく考え込んだ。

テーマ７：親子が共有する思い出

そして，Ｙさんは自分の考えを思いつくままに語ってくれた。

それが絆じゃなくても，あの子が振り返ること，思い出みたいなものが残るのかな，とか。（筆者「思い出・・・思い出ですよね。」）
今，話してて一個だけ思い出したんですけど。あの子が小さい頃，私，どんな日でも必ず「おやすみ。いい夢みようね」って言って寝ていて。あの子も私に同じように言ってくれて，寝ていたんです。いつのまにかなくなったんですけど，あの子が最近外泊先から電話をかけてきて。良いことがあったみたいでハキハキしてて。その時に，電話を切る時に「おやすみ。いい夢みようね。」って言ったんです。親子でこの言葉を交わしてたってことを，この子覚えていたんだなって。瞬間瞬間で生きてるけど[2)]，なんらかの思い出があるんだな，ってその時思った。（図3）

障害のある子を育てる母親研究では，母親の経験の語りは「意味づけ」として捉えることが多い。しかし，経験は個人による意味づけだけではなく，ひとつひとつが母親の記憶のなかでの他者との思い出として保存されている。それは唯一無二のものである。

テーマ８：たまに一瞬つながる

親子が共有する思い出によって一瞬つながったエピソードについて，Ｙさんは解釈をするように語りを続けた。

> 瞬間を生きているので，私の何次元かとあの子の何次元かの世界と時間の軸がぽっと合った時に，思い出すのかもしれませんね。一瞬の実感できる交流があったというか。手ごたえがあったっていうか。これが一生のなかの一回きりかもしれないけど，それはわからない。それもこれも，20年間とりあえず生活をともにしているからこそかもしれませんね。（図3）

逐語録にして読み返してみると，この語りのユニークさに驚く。このようなユニークな経験と語りは，ケアする母親言説に閉じられた自分をその外に連れて行くもの，言説を揺るがし，豊かにするものと筆者は捉えた。

ここまでの対話のシークエンスから，言説を抜け出す言葉の生成を妨げるもの，促すものについて考察したい。

4. 考察

4-1　具体的なケアについて語れないことの危うさ

Ｙさんは，これまで長い間，子育ての主流の言説と自分の子育てを比較することで自問自答を繰り返していた。本論の冒頭では，ケアする母親言説は母親自身が言説の枠内で実践をすることにより強化されてきたと述べたが，Ｙさんとの対話を解釈することにより，ケアを続けながら言説の外に抜け出すことは，一人では難しいことがわかってきた。

子育て期の女性は，日々の育児をめぐる心理的負担を受け入れる方略として子育てを「成長課題」と意味づける側面があるが（徳田 2004），本論の事例からは，それとは違う側面があることが見えてくる。Ｙさんは既存の母親言説に納得できず，むしろ傷つけられてきたという怒りを表明した。怒りを語る前のＹさんは，自分の傷つきよりも息子の傷つきを心配し，その原因が自分なのではないかと責めながらも怒りを抑えている状態が長く続いていた。金井(2011)が指摘するように，家庭内でケアに従事する母親が性別役割分業や母性愛などの社会的規範を内面化したまま自らの傷つきを抑圧し続けることは，自らが抑圧する側になり得るという危うさを孕んでいる。

この危うさの根底には，母親個人の資質の問題ではなく，ジェンダーに関連

する二つの構造的問題があると考える。ひとつは，言うまでもなく，ケア役割が過度に母親に偏っている問題である。山下（2016）がおこなった発達障害児の母親の生活実態調査によると，対象者46人中，主なケアの担い手は，母親40人に対して父親は1人，その他が5人であった。2020年OECD（経済協力開発機構）が公表したデータによると，日本において女性が無償労働に割く時間は男性の5.5倍であることがわかっている。この現実のため，障害のある子を育てる「家族」「親」と題された研究においても，実際に対象となるのは圧倒的に母親の数が多く，育児時間の父母間での比較調査はきわめて少ない。近年では，障害のある子をもつ父親を対象にした研究も増えつつあり，語りから仕事との板挟み，母親への協力，自己成長が見出されている（今西 2013, 鈴木・中垣 2018）。しかし，ジェンダー不均衡の問題としての議論は十分とは言えない。

もうひとつは，母親が自分のケアについて「自由に語り得ない」という社会の問題であると考える。障害のある子を育てる母親がケアそのものについて自由に語る時間と場が社会的に保証されているとは言い難い。ケアする当事者である最首（2005）は，日常の生活で具体的なケアに翻弄されていると，さまざまな考えや思いがぶつかり合っていても，それを話したり記述したりするのは難しいことを証言している。ケアに没頭している者がケアを相対化して語れるようになるまで，ある程度の時間が必要であることを示唆している。加えて，自由に語ることを保証するもののひとつに，聴き手の対話的な態度がある。本論のインタビュー序盤でYさんが違和感を言語化することが難しかったのは，自分の具体的なケアとケアする母親の規範とを照合していたためと推測できる。しかし，後半ではそこから抜け出して，新しい言葉が生成された。自分が日常的に実践している具体的なケアを，一方向的に批判されることなく自由に語れたことが鍵となったと考えられる。

4-2　対話が引き出す変化

本論のインタビュー事例において，対話が語りに起こした変化はインタビュアー（筆者）が予期しないものであった。研究において語りを探求することは語りを制約する社会的統制に抵抗するさまを見出すことも含まれる（Ellis & Bochner 2000）が，本論の事例では，「抵抗する」という能動的なものではなく，「気づいたら言説の外にいた」という展開を辿った。図2～3からは語り手と聴き手の問わず語りが多くなっていたことがわかる。ここに，合意に至ろうとせずに複数の声を響かせるという対話の特性（Seikkula & Arnkil 2016）が見て取れる。対話的であれば，能動的に変化させようという意図がなくても事態

に変化が起こることが示された。

響き合う声には聞き慣れない「ノイズ」が含まれることも，新しい発見であった。Ｙさんとの対話では，冒頭から順に「違和感の語り→怒りの語り→脱出の語り」のシークエンスが見られた。怒りは，喜怒哀楽の4つのなかではネガティブな感情として扱われる。しかし，Ｙさんとの対話事例では，まず怒りの表明があってから，その次に新しい言葉が創出されるシークエンスが見られたことは注目に値する。怒りをネガティブなノイズと捉えずに，表出しても良いと保証されている対話の機会は，ケアする母親たちが言説から脱出する契機になると考えることができる。

4-3　パーソナルなケアの記憶

怒りの表出の勢いに乗ったかのようにして発せられた，Ｙさんの「怖い」「親子の断絶」という言葉は，母親言説の壁を突き抜けるノイズのような言葉だった。その後に，ほぼ唐突に「思い出」が自分たち親子をつないでいると思い至る具体的なエピソードが語られた。このユニークな語りは，どのようにして生まれたのだろうか。

記憶と語りの関係について，歴史学者の岩崎（2006: 231, 232）は，「記憶が語り始める」と表現し，「記憶に関する私たちのあり方を説明するときには，（能動相ではなく）中動相というのが適切なんじゃないか」と述べている。つまり，人と記憶は制御可能な関係ではなく，記憶に導かれて語らざるを得ない状況に置かれるという，予測しきれない関係であると言える。想起は文化の影響を受けるが記憶はそれに抗うものという岩崎の指摘を援用すると，Ｙさんに起きた現象は，Ｙさんのケアの記憶が語り始め，ケアする母親言説という文化に抗うものとなった，という解釈が可能であろう。

ケアの記憶はその人固有のものであり，既存の言説の枠に当てはまらない自由なものと評価することができる。Ｙさんの「思い出」によって「たまに一瞬つながる」という親子についての語りは，ケアの記憶に裏打ちされたものであるからこそ，自由に自分たちなりの道に目を向けるきっかけとなった。このプロセスから，ケアする母親言説から抜け出す言葉は，ケアの記憶によって喚起され姿を現すと考えられる。

5.　おわりに

本論では，ひとつの対話事例をもとに，成長という未来への視点を内面化させられる現代の母親にとって，ケアの記憶という過去への視点が内包している

自由とそれがもたらす変化を見出した。ケア役割を負いながらも周縁化されている現状にあって，社会の中心が形成したケアする母親言説から母親自らが脱する契機を示したという点で，意義があると考える。

最後に，本論で解釈した対話は一事例のみであり，考察されたことは仮説の段階である。主流の言説から脱する言葉が聞かれたとしても，対話の継続がなければ，一回限りの語りになり得ることが課題である。今後，ケア実践に援用できる理論とするためには，対話的な営みのなかで仮説を問い直し続ける必要があるだろう。

（ぬまた　あやこ　白梅学園大学）

謝辞：本研究におけるインタビューにご協力いただいたＹさんに感謝申し上げます。また，本稿のもととなった博士論文の作成にあたり，東京都立大学の浜谷直人名誉教授，田中浩司准教授，杉田真衣准教授からご指導いただきました。厚く御礼申し上げます。

［注］

1）戦争体験，差別体験，職業に関するものが多い。著名なものでは，スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ著（三浦みどり訳）『戦争は女の顔をしていない』，藤本和子著『塩を食う女たち　聞書･北米の黒人女性』など。日本では，伊藤（2013）によれば，1950年代の戦後民主主義高揚の影響により，母と自分の人生を書きためる活動が進んだという。ある地域における，農業，繊維，炭鉱などの労働者としての女性の語りは大変貴重な歴史的資料である。

2）Ｋくんは発達特性によって思考の移り変わりが速いため，Ｙさんは「瞬間瞬間を生きている」と表現している。

［引用文献］

Alexievich, S. 1984 War's unwomanly face. Progress Publishers.（=2016, 三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』岩波書店）

Anderson, C. & Jack, D.C. 1991 Learning to listen: interview techniques and analyses. Gluck, B. G. & Patai, D. Women's Words. Routledge, 11-26.

綾屋紗月・上岡陽江 2017「発達障害と依存症の仲間が交差するところ」『現代思想』，45，（15），161-185

綾屋紗月・熊谷晋一郎 2010『つながりの作法　同じでもなく違うでもなく』NHK出版

Brinkmann, S. & Kvale, S. 2008 InterViews, Learning the Craft of Qualitative Research Interviewing. Sage Publications.

Chanfrault-Duchet, M-F. 1991 Narrative structures, social models, and symbolic representation in the life story. Gluck, B. G. & Patai, D. Women's Words. Routledge, 77-92.

Drotar, D., Baskiewicx, A., Irvin, N., J., Klaus, M. 1975 The adaptation of parents to the birth of an infant with a congenital malformation: A hypothetical model. Pediatrics, 56, 710-717.

Ellis, C. & Bochner, A. 2000 Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Research as Subject. Handbook of qualitative research. Sage Publications, 129-164.（=2006, 平山満義監訳・大谷尚・伊藤勇訳「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」『質的研究ハンドブック3巻　質的研究資料の収集と解釈』北大路書房）

Erikson, E.H. 1982 The life cycle completed.　W.W. Norton & Company.（= 1989, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル，その完結』みすず書房）

藤本和子 2018『塩を食う女たち　聞書・北米の黒人女性』岩波書店

藤原里佐 2006『重度障害児家族の生活　ケアする母親とジェンダー』明石書店

萩原久美子 2017「保育供給主体の多元化と公務員保育士―公共セクターから見るジェンダー平等政策の陥穽―」『社会政策』，8,（3），62-78

秦かおり・岡本多香子・井出里咲子2017『出産・子育てのナラティブ分析―日本人女性の声にみる生き方と社会の形』大阪大学出版会

Holstein, J. A. & Gubrium, J. F. 1995 The Active Interview. Sage Publications.（=2004, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティヴ・インタビュー：相互行為としての社会調査』せりか書房）

今西良輔 2013「発達障害児を育てる父親の生活体験:3人の父親と息子達の歩み」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』，9,（1），27-34

伊藤康子2013「地域女性史と聞き書き」『日本オーラル・ヒストリー研究』，9，53-63

伊藤哲司2013「生活と暮らしの変革」やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也編『質的心理学ハンドブック』新曜社，434-465

岩崎稔 2006「虚偽の記憶と真正性」冨山一郎編『記憶が語りはじめる』東京大学出版会，227-263

金井淑子 2011『依存と自立の倫理〈女／母〉の身体性から』ナカニシヤ出版

春日キスヨ 2011『介護問題の社会学』岩波書店

南雲直二 1998『障害受容　意味論からの問い』　荘道社

中田洋二郎 2017「発達障害における親の「障害受容」―レビュー論文の概観―」

『立正大学心理学研究年報』，8，15-30
夏堀摂 2003「親の障害受容」研究の批判的検討」『社会福祉学』，44,（1），23-33
能智正博 2006「“語り”と“ナラティヴ”のあいだ」能智正博編『＜語り＞と出会う：質的研究の新たな展開に向けて』ミネルヴァ書房，11-72
能智正博 2013「ナラティヴ・テクストの分析」やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也編『質的心理学ハンドブック』新曜社, 324-344
沼田あや子 2016「発達障害児の母親の語りのなかに見る家族をつなぐ実践―「葛藤の物語」から「しなやかな実践の物語」へ」『質的心理学研究』，15，142-158
OECD 2020 “Employment: Time spent in paid and unpaid work, by sex.” https://stats.oecd.org/index.aspx?queryid=54757（2022年6月30日最終アクセス）
最首悟 2005「ケアの淵源」川本隆史編『ケアの社会倫理学』有斐閣，225-249
Seikkura, J. & Arnkil, T.E. 2006 Dialogical Meeting in Social Networks. Routledge.（高木俊介・岡田愛訳『オープンダイアローグ』日本評論社）
鈴木江利子・中垣紀子 2018「在宅で学童期から思春期にある障がい児（者）を育てている父親の体験」『日本小児看護学会誌』，27，9-17
天童睦子・高橋均 2016「育児言説の社会理論」天童睦子編『育児言説の社会学―家族・ジェンダー・再生産』世界思想社，2-19
徳田治子 2004「ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から」『発達心理学研究』, 15,（1）, 13-26
氏家達夫・高濱裕子1994「3人の母親：その適応過程についての追跡的研究」『発達心理学研究』，5,（2），123-136
山下亜紀子 2016「発達障害児の母親の生活実態に関する研究：自記式質問紙調査をもとに」『人間科学共生社会学』，7, 37-46

（2022年9月25日掲載決定）

Memories of Caring Bring New Words for Escaping the Discourse of Motherhood: A Case Study Dialogue with a Mother Raising a Son with Developmental Disorders

NUMATA Ayako
(Shiraume Gakuen University)

Mothers raising children with developmental disorders take part in the discourse of motherhood constructed by society, despite often feeling uncomfortable. This qualitative study examined, through a case study dialogue, key concepts in understanding how to bring new words for escaping the discourse of motherhood. We interviewed a mother of a boy with developmental disorders who tended to blame herself and have no confidence in her child-rearing abilities. In the dialogue, she used some new terms for escaping the discourse of motherhood that we had not heard before. By analyzing the dialogue, we found that she referred to "uncomfortable talk," "anger talk," and "escape talk" in sequence, and memories of caring, which were unique to her, stimulated these new terms, which did not apply to the dominant model of motherhood.

Keywords: mother, memories of caring, discourse, dialogue